

たとみられるバリ周辺において顕著であり、特にそれはアッコン陥落後の約一〇年間で中心とする短期間のものであったという。

十字軍が西欧に与えた文化的影響については、従来必ずしもあまり高く評価されて来たとは言えないが、他の分野についてもこうした実証研究が積み重ねられることにより、新たな展望が開ける可能性もあることを窺わせる。写本の彩飾という限られた事象に關してではあるにせよ、短命ながら明確な影響が見られることを力説する著者の所論は興味深い。

末尾には、本文中に述べられた写本のカタログが付されており、個々の写本の現在の所蔵地と名称、制作年代と場所、写本学的統計、罫線の図解、装飾についての略述、参考文献、由来、装飾の簡単な分析等が列挙されている。

全九六頁三〇三葉に及ぶ豊富な写真は非常に貴重であり、可能な限り原寸大で採録されていることと相俟って、本書の今一つの眼目であると言えよう。ただ、Buchthal 上掲書を始め既に他の本に掲載されているものについては省略されており、本書を単独で読む場合には少しわかりにくい所もあ

ることは事実である。又、色刷りが僅か一頁のみであることも甚だ残念である。実際、文中には色彩についての言及（絵の具の色ばかりではなく用紙の色等についても）が多く、もう少し色刷り頁を増やしてほしいと思うのも強ち望蜀とは言えないであろう。

(三二一頁 写真九六頁 一九七六年
Princeton University Press)
(八塚春児 京都大学研修員)

Bernardo Sepúlveda Amor et al.,

Las empresas transnacionales en México

超国家企業Ⅱ多国籍企業の問題は、今日の低開発諸国がおしなべて直面している最大の課題の一つである(ラテンアメリカ諸國のばあい、より具体的には米国籍企業)。

メキシコもその例外ではなく、原則として一五%以上の外資参加をみた現地企業を超国家企業の子会社とみなすならば、一九七二年には製造工業の生産総額の三四・九%がそのような企業群によるものであった(Fernando Fajnzylber & Trinidad Martínez Tarragó, *Las empresas transnacio-*

nales, 1976, p. 153)。

本書『メキシコにおける超国家企業』はこの今日的課題に意欲的に取りくむメキシコ大学院大学国際学センター所属の研究者三名の論文から構成されている。すなわち、セプルベダ著「メキシコの工業政策と超国家企業」、ペイセール Olga Pellicor de Brody 著「外国資本の誘致(一九五三—五八年)」とメイール Lorenzo Meyer 著「外国民間資本への抵抗——石油のばあい(一九三八—五〇年)——」の三篇である。第一のセプルベダ論文は現状分析的・政策提言的であるので、ここでは歴史分析的な他の二篇を紹介したい。

一九三八年三月のメキシコ石油産業国有化が世界石油産業史にのこる画期的な出来事だったことは周知の事実であろう。しかし被取用資産に関する補償協定の締結(一九四二年)後も、石油産業経営への復帰をはかる米国籍国際石油資本と、取用以後のメキシコ石油公社の運営に苦しむメキシコ政府とのあいだで静かな闘争がくりひろげられていたことは、さほど知られていない。この一九四〇年代の紛争を「第二の石油戦争」と呼ぶマイエール論文は、いわば「第

一の石油戦争」を扱った彼の名著『石油紛争のなかのメキシコと米國（一九一七—四二年）』（*México y los Estados Unidos en el conflicto petrolero, 1917-1942*, 2nd ed., 1972）の補論といえるものであり、米國國務省およびメキシコ外務省の外交資料を駆使した実証研究である。この「戦争」は、ふたたび経営参加を果たせなかったという意味では、國際石油資本の敗北に終わった。メキシコの工業化にともなう国内需要の増大によって販路問題は解決され、またメキシコ政府部内の開発優先派（復婦容認説）と國家統制派（復婦嚴禁説）との妥協の産物である「危険負担契約（*contratos-riesgo*）」方式の採用の結果、國有化原則を損なうことなく、米國の独立系石油資本から最低限必要な資本および技術が一時的に導入されることになった。以後、石油・電力・運輸・通信・銀行などの重要部門は多かれ少なかれ國家統制のもとに置かれるという外資政策がしだいに定着した。

実業界がラテンアメリカの域内先進諸國の國內市場向け工業投資の可能性を検討しはじめたことが指摘されているが、分析の重点は、國內要因の解明に置かれている。ペイセールによれば、一九四〇年代初めからの工業化による経済成長が一九五三年にとだえると、メキシコ政府は、累進的税制改革による所得再分配政策に訴えるのではなく、逆に、消費文明の享受をのぞむ上流および中産階級の要請に応じる耐久消費財・中間財の輸入代替工業化を積極的な外資誘致によって進めるほうを選択したのである。メイエルとペイセールの両者に共通するものは、メキシコの経済的従属がその形態を変えなすぎないとする視点である。メキシコは、第二次世界大戦ごろまでに石油産業などの伝統的輸出産業における従属の段階をほぼ克服しえたにもかかわらず、しだいに新しい従属、輸入代替工業化を通じての従属におちいらざるをえなかった。このように批判的なメキシコ現代史像が生まれてきた背景には、メキシコの奇蹟の原動力であったこの輸入代替工業化路線が一九七〇年代に破綻し、エチエベリア Luis Echeverría Alvarez 前政権（一九七

〇—七六年）も「第三世界外交（*tercer mundismo*）」などの「改革」に着手したという時代状況が見られる。しかしこの「改革」にたいする批判的考察の例としては、ペイセール自身の「一九七〇年代のメキシコと対米関係」（Julio Cotter & Richard R. Fagen eds., *Latin America and the United States: The Changing Political Realities*, 1974）をあげた。

ともあれ純粹の多国籍企業論とはいえないかもしれないが、専門研究そのものがいまだ豊富でないメキシコ現代史研究にとって、本書は貴重な貢献をなすであろう。

（一六七頁—一九七四年）

Mexico City, El Colegio de Mexico)

青木芳夫 メキシコ大学院大学研修員)

ルーシー著・井筒俊彦訳・解説

『ルーシー語録』

ルーシー（二〇七—二二七三、Balki 生まれ）は、イスラーム世界が生んだ屈指の神秘主義詩人であり、現トルコ共和国の都市 Konya を本拠とする神秘主義マウラウィー（メウレウィー）教団の創始者とし